

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	精神的帝國主義 : 雜録
Author(s)	海老名, 弾正
Citation	龍南會雜誌, 99: 61-67
Issue date	1903-05-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5633
Right	

雜 錄

精 神 的 帝 國 主 義

本篇は、曩に海老名彈正氏が本校に於て演說せられたるを筆記したるもの。誤謬、遺漏の点あらば、うは記者の責なり。私は今再び茲に諸君と會する事を得て、何となくアトホームに感じます。私の郷里が九州にある事、私の知己が多く此地方にある事、又私共の發行する雜誌「新人」が大に諸君の愛讀を被るなどの事は私として深く諸君に緣故あることを感せしむる次第であります。私は決して茲に他人として立つたものではありません。

偕て、近頃帝國主義といふ事は常に吾々が目にし耳にする所であります。るれに我輩が精神の二字を冠せられたのには固より意味があるので、即所謂帝國主義は單に政治の方面より言つた者であるけれども、精神的帝國主義とは宗教道德の方面より之を論ずるのであります。元來此帝國主義なる者は北米合衆國が唱へ出した者である。共和國の合衆國が帝國主義を唱へるといふのは少し妙に聞ゆるけれども、所謂合衆國の帝國主義は昔の様に一個の君主が侵略、壓制、亂暴を極めたものと大に其意味を異にし、寧ろ國民全体が活動する上にあらはれる者、即個人的帝國主義でなくして國民的帝國主義であります。コレは實にエライ所であるヘーゲルが「支那には一人の天子があつて四億の奴隸がある。アゼンスでは天子は市民で人民は總て奴隸である。然し我獨逸國にては上天子より下賤伏屋に住む者まで皆悉く帝王である」といつた事がある。支那文明とアゼンス文明と獨逸文明の

異なる所は實に此處に存するのである。米國の帝國主義は此獨逸民族と全様に、國民が舉りて王である王が集つて國家を組織して居るといふ考で諸外國に當るのであります。而して此の主義は單に政治の上のならず、總ての方面に應用されて居るのである。即合衆國の婦人達が集つて矯風會を作るときには、直ちに之を萬國矯風會となして全世界に及ぼさうと力める。從て萬里の波濤、シベリヤの荒野を物とも思はぬ女丈夫が起つて來る。かよわい婦人の身を以て我が福島少佐にも劣らぬ壯圖を企てるといふのは實にエライ。彼等が勞働會を起すにも矢張左様である。即萬國勞働會として其本部を彼國に置くのである。それから又宗教上の方面を見ると萬國共勵會、萬國青年會がある。先年ロンドンで萬國共勵大會が開かれた時、彼等は太西洋の定期航海線を買上げて、何千人といふ會員が英國に押しかけたのである。實に盛な者である。此の外、實業界ではモルガンの様な豪傑がトラストで以て萬國の經濟を統一しやうとして居る彼は實に經濟界のナポレオンである。米國の富を以て世界の富を支配しやうといふ大計畫を立てて居る。

精神的帝國主義が最もよく顯はれて居る所は天主教會であります。殆んど全世界に其の威を振つて居たローマ帝國は成程北方蠻族の爲めに亡ばされたけれども其仆れたローマ帝國の遺骸の中から生長し發達した此天主教會は遂に全歐洲を精神的に征服したのである。一時新教の勃興によりて多少の頓挫を來したけれども、今猶法王の支配の下に全世界に通じた精神的帝國を建てて中々侮る可らざる勢力を有して居る。世の政治家は喃喃々、支那問題や滿州問題を論ずるけれども、更に此精神的大帝國に眼を注がない。政治上、經濟上の征服も固より恐るべしだが、一層恐るべき者は此精神的征服である。而して今や一步を進めて政治的帝國と精神的帝國とが合体して活動する様に

なつて來た。コレコソ實に恐るべきものである。私の友人が近頃印度から歸つて話す所によると、彼の國には約二百萬の基督信徒がある。が、然し此等の者は總て英國化された者で英國に對して獨立の反旗を擧げやうなどといふ意氣のある者は一人も居ない。全然英人と全心全服になつた者だといふ事である。唯僅かにブラマ教徒が印度魂を有するのみで、回々教徒の如きは唯英人に籠絡されて居て、何の役にも立たない。若し夫れ今後全印度人が基督信徒となつたならば印度は立所に滅亡するだらうといふ事である。昔から耶蘇教は國を取るものだと申しますが確かに其れは一面の眞理を穿つた言である。即印度が其れを證明して居る而して此事は臺灣の基督教信徒を見ても分る。彼等は會堂にキリストの肖像の外に、英國司令艦センチリオン號とヴィクトリア女王の寫眞を飾つて居たといふ事ではありませんか。斯の如き基督信徒は若しもの事あらば第一に英國の軍門に降参する者である事を示して居る。清國の有様も亦實に同様である。昨年彼國の大儒吳汝綸氏が日本へやつて來て、在京の基督教々役者の前に「ドウモ貴國のキリスト教と弊國のキリスト教は大に其趣を異にする様である。弊國は屹度教民（キリスト教徒）によりて滅亡する。何せかといふに、彼等は何かといふと、すぐ宣教師に訴へる、ソシテ宣教師は公使に、公使は本國政府に訴へるといふ風で早速國際問題になるからである」と申したのはツマリ彼國の基督信者が歐米の宣教師から精神的に征服されて居る事を示す者である。幸に吳如綸の疑問であつた様に我國の基督信者は此の如き骨無しでない許りでなく、若し耶蘇教が果して國を取る者ならば、我も亦之を利用して外國を取らうといふ元氣を持つて居るのである。

歐米諸國が今日の様に、唯政治的帝國主義許りでなく、更に競うて之を精神的に應用して居るのに

は深い根據とエライ利器とがあるのである。ソレハ決して國民的な者ではない。實に世界的大原理である。我々は羅馬の歴史を讀んで、初め其の共和國であつたのが、後帝國に發達し、遂に全世界に君臨するに至つた活劇を見る。又ギリシャ民族も其始めは國民的範圍を脱出する事が出来なかつたけれども、ソクラテスが出づるに至つて百尺竿頭一步を進め、盛に倫理道德に關する世界的原理を唱導したのを見る。彼が毒殺さるるに至つたのは、其實、國民的思想と世界的思想との衝突であつたのである。ソレカラ又ユダヤの國では國民的宗教が一躍して世界的宗教となつたのを認める。即キリストなる大人格が出でて、宗教の世界的原理を見出し、依て以て世界を征服して神の國を建設しやうとしたのである。ガカラ彼は傳道の劈頭先づ「神の國は近けり」と叫んだのである。此の如き大理想、大抱負はどうも東洋の宗教家が氣付かなかつた者の様である。然し當時の基督信者もローマ帝國と共に十分神の國の眞想を解し得なかつた爲めに、此キリスト教の精神的帝國主義とロマンチン大帝に至つて遂に此の兩帝國主義は調和合体したのである。誠に大帝の卓見と炯眼とはエラかつたといはねばならぬ。今日歐米諸國が稱ふる帝國主義なる者は其素養と根據を以上の三原理に置いて居るのである。

近頃米國あたりでは中々面白い團體が起りまして「Christianity and patriotism. By this conquer!」(基督教と愛國、此れによりて征服せよ)といふ事を掲げて其標語となし、其れに國旗と十字架とを交叉して其團體の記號として居る。別に信仰箇條も何も無い。コレデ以て布哇も取り、フィリッピンも取つたのである。而して現に此運動は日本にやつて來たのである、吾々は斯る帝國主義に對して

果して如何なる態度を取る可きであるか。一言を以て吾々の意見を發表すれば、吾々と雖も固より大に帝國主義を欲するものである。吾々は今餘り政治的方面に就いて言ふ時を有しながら、吾々門外漢にも、實に殘念でならぬことが多い。ドウデス、學士達がタツタ二十五圓貰つて互に食ひ合ひ、嘔み合ひながらも、矢ッ張り内國に齷齪して居るではなひか。コレガ即島國根性である又コレコソ一生涯、生土を離れぬ土人根性といふ奴じや。下等勞働者が外國に殖民した所で何の日本民族の膨脹だらう。今は須く學士達が即ち王がドンンドン出掛けて行かねばならぬ。然し私が大に諸君と共に考へ度いのは倫理宗教の方面であります。日本の倫理は世理的でありませうか、國民的でありませうか。神道は言ふ迄もなく國民的宗教である。ソシテ此國民的宗教は既に已に 그리스、ローマと共に世界歴史の上から消滅して仕舞たものである。佛教はドウであるか。元來は世界的であつたけれども日本に入て全く國民的となつた。が、近頃又漸く復活して色めいて來る様な形勢がないではないけれども、頗る怪い者だ。然るに基督教に至つては一大勢力である。大言壯語を吐く様であるが、私の教會などでは毎日曜二百乃至三百の青年學生が集つて來る。又私共の「新人」は將に宗教雜誌界の女王といふ有様である。コレは實にソツ行く可き筈である。諸君ドウデス、佛教の帝國主義を以て世界に雄飛しやうといふ國が何處に在りますか。唯僅かに日本がある許りです。昨年印度のダンマバラ！が我國へやつて來て「印度の佛教駄目です、支那も暹羅も駄目です。唯貴國の佛教のみが生きて居る。何卒シツカリヤツテ下さい」と泣いて訴へたではありませんか。然し基督教は之と大に其趣を異にし、正に世界の大勢と一所に動いて居るのである。コレは實に基督教の幸である。佛教は安南、暹羅で何程發達したか。支那日本で何程發展したか。殆んど零である。然るに其

基督教は之に反し、猶太では單に事實のみであつたのが希臘に入りて健全なる哲學と給合し、更に羅馬に入つて偉大なる人格に體現したのであるをから又アルプス山を超えて獨逸國に流れ込んだ。然るに此國民實に立派な國民で、神秘的で、哲學的で、又政治的である。此民族の間に基督教は深く深く這入つたのである。それから今度は英國に入りて實際的に生長したのである。要するに基督教の歴史は發達の歴史である。西洋の文明史其物である。孔子は嘗て人よく道を引ひ、道よく人を弘むるにあらずと言つたが基督教は實に此天幸に與かつた者である。即基督教は世界文明史の大勢と共に活動して居るのである。諸君試に考へて見給へ。朝鮮に西郷隆盛の如き大人物が出る事が出来るか。逆も出来ないだらう。佛教徒が瞑目一番、神も佛もない、天上天下唯我獨尊と考へ込む意氣は中々エライ者である。けれども彼等が一度目を開いて事業を計畫する所を見ると東亞佛教會位が關の山である。之を基督教の萬國的运动に比較してどうである。斯の如き意氣銷沈、氣息奄々たる間よりドウして人物が生れませう。元來西郷が鹿兒島に顯はれたといふ事には中々深い原因がある。蓋し薩摩は日本の西陲で、餘り幕府の威令が行はれて居なかつた上に、齊彬公の如き大人物があつて、夙に世界文明の大勢に觸れて居たのである。西郷の如き實は此世界文明の大勢が生み出した世界的人物である。我々は又かの普魯西が勃興して日耳曼帝國が形成されんとした時、シユライエルマツヘルだの、ゲーデだの、カントだの、フイヒテだのといふ大人物の彬々として輩出したのを見るが、是は全く國家の大勢と精神とが動いた結果である。蓋し大勢といふ者はエライ者で一度これに觸れては懦夫も凜然として起たざるを得ないのである。基督教も斯の如き大勢其物であるといふつても善からうと思ふ。佛教は不幸にして斯の如き世界的大潮流を有しないのである。我々

は須らく此世界文明の大潮流なる基督教に接觸し、同化して大に奮發興起せねばならぬ。然し最後に諸君と共に考へねばならぬ者がある。それは我日本國には昔から神ながらの道があつて、佛教に接しても、儒教に觸れても未だ嘗て征服されなかつたことである。應神天皇の御世、高麗の國から我國に奉つた表文の中に高麗日本を教ふといふ様な文字があつた時、皇子稚郎子は立所に之を引き裂き給うたといふ事であるが實にコレは我々の意を得た者である。コ、が日本人と支那人と異なる所である。日本人は何も彼も宣教師の前に低頭平身、罪を悔い、涙を流して基督教者たる事を願つた者ではない。斯の如き者は其實基督教者でなくして、唯精神的奴隸に過ぎぬ。我々日本人は唯自ら信じ、自ら取つたのである。何も天國地獄の話に威されて信じたのではない。唯我内に響く大なる「主」の聲に動かされて立つたのである。然し悲い事には我日本人は過去三十有余年の間、殆んど精神的修養を等閑にして居た爲めに今や恐るべき精神上の飢饉に陥り、故高山博士の如き英才ですらもパンを與へよ、パンを與へよと叫んだのではないか。一個のホールといふ神學者が來てさへ毎日毎夜何千の青年學生が彼の講演に集まるといふ有様ではないか。コレは實に恥しい事である。ア、諸君、今は深く此の邊の事に警醒しなければならぬ。斷乎として慾情利達を捨て、公義正道の上に立ち、大和民族固有の精神を以て宇宙の大精神、活ける眞の神につらならねばならぬ。而して始めて我々は帝國主義で以て世界に活動することが出来る（拍手）